

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	島田先生をしのぶ
Author(s)	今井, 宏
Citation	歴史研究(32): 14-15
Issue Date	1966-12-18
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/8028">http://hdl.handle.net/10109/8028</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

たが、島田さんの研究の態度は狭いものではなかった。広く海外の西洋史研究の動向にまでいつもよく注意されていたことは史学雑誌に幾つも発表された研究動向の紹介にもよくうかがわれる。最近では島田さん以上に専門に深く入りこんで研究している西洋史学者は多いかもしれない。しかし自分の研究の位置を、西洋史研究の全体の流れの中で、正当に位置づけて見ているような学者は少ない。得がたい人を失ったという感じはここにもある。

島田さんは自分の研究ばかりでなく、いろいろなことに関心を持って、広く本を読んでおられた。わたくしが「世界史のナゾ」とか「世界史ごぼれ話」などのような雑中の雑のようなものを書いていた時にも、よく「こういう話はどうだろう。君には役に立たないだろうか」などと教えて下さった。その上時代の動きにもいつも生き生きとした興味を持ち、反応をしておられた。どちらかという逃避的、ディレッタント的なわたくしなどは、島田さんにひきくらべて、こんなことではいけないと思わせられることが度々あり、よく反省したものだだった。

島田さんのおかげで忙しくなかったとかどうとかいう以上にこうして学問のしかた、物事への関心の持ち方、人間の生き方、そういう点でわたくしは島田さんには助けられ、教えられた。実に惜しい人をなくしたと思っている人が多いだろうが、わたくしにとってはかけがえのない人を失った感じがする。大要にぶいわたくしは、島田さんが何気なくいわれたことの意味が、今

になってよくわかったりして、「ああそういうことだったのか」と思うことが多い。

島田さんを知っている人は、多かれ少なかれ、よきかがみを見失くしたと思っていることだろう。わたくしにとってはそれはひとしおなのである。島田さんから学んだことを、わたくしもせめてその万分之一でも、自分のものにしたいたいと思っている。

### 島田先生をしのぶ

今 井 宏

こんなに早く、こんな文章を書かねばならないとは。

もうかれこれ二十年近くにもなる。敗戦のどさくさのなかで旧制高校に入った私が、新入生歓迎コンパの席上、演壇に上られた先生を、遠くからかい、まみたのが最初であった。そのとき、上級生の一団からあがったかけ声を、今も忘れることはできない。「水高のヒューマニスト、がんばれ!!」ヒューマニスト、この言葉は混乱と汚濁に満ちた当時の世相にあつて、何となく新鮮で甘美な響きを伝えていたことか。その後、親しくお教えをうけるようになって、「ヒューマニズム」こそは、先生の学問と生活を律するものであることが、わかってきた。しかし先生は、学問的対象としてヒューマニズムを語られることはあつても、自らは、よく世間にありがちなヒューマニストぶる

姿勢はまったくとられなかった。いなむしろ、そこにつきまとう一種の偽善の匂いに反撥を示されるの方が多かった。凡そヒューマンイズムが濫発され、その本来の精神からはずれていくことが、先生にとっては我慢がならなかったのに違いない。

勝手なときにお宅に上りこんで、いつまでも帰らない私などは、さぞ御迷惑のことだっただろう。先生はいつも変わらず、いやな顔ひとつせず、いつまでも相手をして下さった、数年前立教大学にお手伝いに行っていたときを思い出す。私のイギリス史のゼミに参加した女子学生が二人とも、卒業論文に大学史をやりたい、と申し込んだ。理由をきいてみると、三年のときに受講した先生の御講義の影響であることがわかった。彼女たちの口ぶりから、彼女たちが、病軀をおしてはるばる水戸から出講される先生の昔に変わらぬヒューマンイズムの香りを、敏感にかぎとっていることをしたとき、こみあげてくる嬉しさと同時にわが身への反省の念にかられたことだった。

教室の島田先生といえ、第一に思いだされるのは、その講義の名調子である。適当なりフレーンと抑揚のある格調の高い講義にすっかり魅了されたものだった。いつか、座談のうちにその秘密を伺ったことがあった。そのとき先生は、「十年も教師をやっていたら、一五二七年十月、マルティン・ルターは……といけば、一時間分ぐらい口をつけて出てくるさ」と、いささか自嘲的な調子でもらされた。だがそれは、講義のすみずみまで神経を行きわたらせて、自信をもっておられた先生にし

て、はじめていえる言葉だということを、このごろしみじみと感じる。

先生が志しておられたのは、言葉の真の意味の歴史家であった。極端に専門分化の傾向のはげしいこのごろの学界にあって先生は何よりも総合の学としての西洋史のありかたを求めておられたように思う。ちようと一年ほど前、病院にお見舞いに伺ったとき、先生がひとときわ熱をこめて語られたのが、そのことだった。「専門家の顔をしない人が、一番こわいよ」と。先生の最後に書かれたものが、これまでのドイツ史中心の御研究とはちがって、イギリスの大学史研究の動向紹介だったことにも、幅広い視野をとりわけ大切に行っておられた先生の今後の御活躍が期待されたのに。数年ぶりで行なわれた先生のことになった『史学雑誌』の「回顧と展望」の仕事に、先生のこの絶筆をとりあげるめぐり合せになったとき、私は先生の変らない暖いお励ましの眼を感じたことであつた。

昨年の春、岡山で開かれた学会のうちに、鞆を肩に歩いておられたお元気そうな先生のお姿、ビルの屋上のビア・ホールでいつものように談論風発、楽しそうに笑われた先生のお顔。今年ももう一週間後に史学会の大会が迫った。出席者の人ごみのなかで、探している私を目ざとく認められて、「おっ」と片手をあげて立ちあがられ、「どこかで、だべろうや」と銀杏並木を歩いていかれる先生。そのお姿ももうみることはできない。もうこれ以上、私には何も書けない。